

## 筑後川導流堤（通称 デ・レイケ導流堤）の謎、考察と新発見

特定非営利活動法人 大川未来塾  
理事 本間雄治

### 1. デ・レイケ導流堤の謎

一級河川筑後川（全長 143 k m）の河口域にほぼ原形を保つ河川港の現役施設である。しかも約 120 年前、明治 23 年に完成した、全長は 6,527m の大川市、佐賀市、柳川市に接する石積み堤である。現在も航路確保の為、推進を保ち土砂の堆積を防ぐ効果は機能している、残念なことにこの導流堤土木遺産の文化財として一級品であるが、国の重要文化財指定が取れていない、所有者の登記ができていないのがその一因となっている。

このデ・レイケ導流堤の起点となる若津港は大川市向島（むかいじま）若津であり古い港榎津の新港でもある、また大川市中心市街地は久留米藩と柳川藩が接する藩境の宿場まちの性格も持ち合わせている。地理的に対岸は佐賀藩であり歴史、文化の十字路ともいえる要衝の河川港である。また江戸期から昭和まで、上流の日田より久留米を経て若津、榎津まで木材が筏として運ばれ、筑後川舟運の最終到着地でもあったため、大いに家具生産が隆盛を極めた木工業の地でもある。

（航空写真提供：国土交通省九州地方整備局筑後川河川事務所）



佐賀市諸富地区

大川市若津地区

筑後川導流堤

次にデ・レイケ導流堤の終点地について記述すると右岸は佐賀市大詫間であり左岸は柳川市昭代である。そして共に江戸期より干拓による農地拡大の地である。また特筆するならば佐賀市川副町大詫間と上流の大川市大野島は一つの島を形成し、筑後川の中洲で2県にまたがる地域特性を有している。

この導流堤に関しては現在の国土交通省にも詳しい資料がなく未だに謎が多い、その謎を列記する次のようになる。

- ・ 本当の目的、大義は？・・・第一の謎とする。
- ・ 設計者は誰？・・・第二の謎とする。
- ・ 工事請負業者は？・・・第三の謎とする。

然しながら、近年の大川未来塾理事本間雄治による研究、探査で多くの事実が判明することとなった。

## 2. 歴史的背景

大川若津港は筑後川最大の「河川港」であり、江戸時代より明治時代の歴史を探究することで「第一の謎」が解けたのである。

### ・江戸時代後期における米廻船業、久留米藩豪商・林田正助（屋号 手津屋）の存在

若津港の歴史を語るにはこの人物が先駆者となる、その人物とは江戸時代後期の久留米藩豪商「林田正助（1823年没）」である。彼は田主丸に生まれ若くして長崎の鉄屋に奉公したが1年半で暖簾分けを許された。林田家は久留米藩の御用商人として田主丸に本店を構えていたが、兄の源次郎の死後、正助は事業を継承し久留米に本店を構え若津港を拠点に米廻船で隆盛を極めたのである。

### ・明治期における佐賀財閥と後世よばれた深川嘉一郎の進出

明治維新後、まだ経済の中心は「米」であった状況下、若津港の物流拠点としての重要性に注目したのが肥前佐賀道祖元町出身の深川嘉一郎である。彼は明治4、5年頃、米商店を若津に構え明治18年には海運造船業として大きく飛躍したのである。このことを受け佐賀の多くの実業家が若津地区、諸富地区に進出を計り、明治近代化「殖産興業」を具現化したのである。多くの説明を割けないが有明海沿岸の三池炭鉱の発展、三井物産の業務進出等も重なり、益々、若津港の近代化における重要度が増したのである。

## 3. 内務省土木局 石黒五十二による「筑後川改修並びに出水防御工事意見要略」の概要

既述したように「河川港若津」は明治政府にとっての「殖産興業」に大きな比重を占め、セメント製造業、近代造船業、鉄道事業等の発展要素に大きく寄与するのである。

このような時代の要請を受け、地元での「三大暴れ川 筑紫次郎」筑後川改修の機運も高まり、時の政府は外国人技師でオランダ人のヨハニス・デ・レイケに明治16年から17年に筑後川巡検を命じたのである。

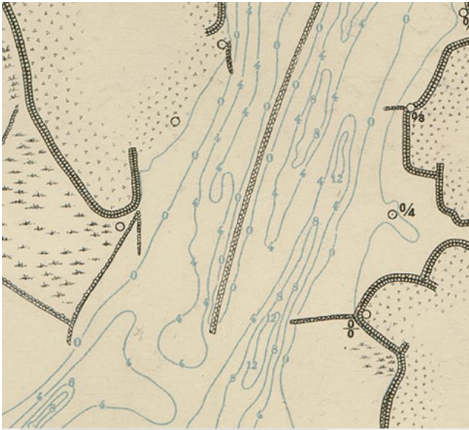
導流堤は通称「デ・レイケ導流堤」と称されるがこのデ・レイケの総合監修のもと、筑後川改修の計画書を内務省土木局技師「石黒五十二（いしぐろいそじ）」により提出させたのである。

復命により出された報告書「筑後川改修並びに出水防御工事意見要略」を精読し筑後川下流の現地を調査すると従前と異なる「新事実」が発見することとなったのである。

### ・制水工と導流堤

新事実とは「デ・レイケ導流堤」は石黒の計画書では「制水工」と表記され、河口部に複数の福岡県と佐賀県に属する「突堤」を設けると表記されている。大正14年の「三潞郡誌」にも「制水工」と記載されている。

河口ノ突堤ハ左右ニカ所ニシテ其東岸福岡縣ニ属スルモノハ長五百五十間西岸佐賀縣ニ属スルモノハ長百八十間而テ堤幅各平均五間且其高サハ平均水位上三尺トス此用タルヤ航路ヲ深ラシムル為メノ並行堤ニシテ導流堤ト云フモ可ナリ



明治 36 年 筑後川改修図一部拡大

第七區土木監督署刊（久留米～熊本へ移管）



航空写真提供：筑後川河川事務所

デ・レイケ導流堤は・・・・・・「制水工」（背割堤）となる。

石黒五十二の突堤が・・・・・・真の「導流堤」（突堤）となる。

それでは「制水工」を導流堤と誤記入したのは「筑後川五十年史」に上記「筑後川改修図」に有る図譜の欄に加筆されたのが原因と推定している。これらのことから総合監修「デ・レイケ」、設計「石黒五十二」であることが確定できる。又、それに関して「真の導流堤は突堤」である新発見に繋がるのである。まさに「第二の謎」解明はこれからの研究に大きく影響を及ぼすと思われる。

#### 4. 請負工事会社「佐賀 振業社」

最後の「第三の謎」についての考察である。筑後川改修工事の中で導流堤は河口～若津までの第一区工事と記述があり、その関連の工事を当時の佐賀新聞記事を探査したのが次の論述となる。ここで仮説を立てた理由は「筑後川改修工事」は当時では「破格の公共工事」であり、金融関係から振業社を割り出したのである。

「筑後川改修のことたる運輸舟棹の利のみ改修するも一朝出水せば堤防の破壊、河身の埋没等を来たし其の害ひいて低水工事に波及するは必然にして、故に低水・出水両工事とも合わせて松尾組ならびに川沿いの各土木業者をして改修する計画なり。」

第二区工事請負 【資料 松尾建設百年史 P24～25 佐賀新聞記事】

- |                   |  |
|-------------------|--|
| 明治 20 年 4 月 3 日   | 佐賀郡、生田源八・養父郡田中英一は筑後川改修につき土木会社設立を計画。千歳川疎水工事や国道工事などの請負を狙っての計画とみられる。        |
| 明治 20 年 4 月 20 日  | 久留米小森野にて盛大に起工式、内務省西村局長、石黒技師参列。   |
| 明治 20 年 11 月 10 日 | 佐賀市街与賀町の栄銀行内に仮設事務所を設け木工事の請負をしていた振業社は同町の元成美女子高跡に移る。（創立 明治 20 年 3 月 佐賀市史）  |
| 明治 23 年 5 月 28 日  | 千歳川の道海島荒籠と沈床の除去工事を求める嘆願書を県議会が内務省に提出。                                     |
| 明治 24 年 1 月 21 日  | 佐賀郡諸富千歳川百間荒籠撤収工事は 23 年 11 月 25 日以来 90%を竣工、振業社、西肥土木会社などが請負う。（西肥土木は田中英一社長） |

以上佐賀新聞記事より

「石黒五十二が佐世保鎮守府の技官として土木局と兼務した関連記事」

明治 19 年 12 月 その敷地整備工事は明治 19 年 12 月、佐世保で入札に付され東京、大阪、長崎、平戸方面から大手業者や豪商が参加したが、東京の藤田大倉組が落札、松尾組はこれを下請けすることになった。【松尾建設百年史より抜粋】

明治 21 年 8 月 5 日 佐賀市街の佐賀振業社が第 3 鎮守府佐世保軍港の付属建築の請負入札を落札。

これらの佐賀新聞記事からして、佐賀振業社が第一区筑後川改修工事を請負ったと推察する。佐賀振業社は当時としては破格の資本金 10 万円で伊丹家の佐賀栄銀行本社内であった。明治 20 年前後の大公共工事 60 万円の国庫工事費は恐らく佐賀財閥へと流れたであろう。佐賀振業社は田上徳十郎が社長であり、彼は佐賀栄銀行の頭取であった文右衛門の弟、田上家へ養子となる。

資料 : 明治 28 年版 近代デジタルライブラリー 日本全国諸会社役員録 (P472) 国立国会図書館蔵

「株式会社 栄銀行 佐賀市」設立明治十五年、資本金十一万円

頭取 伊丹弥太郎 取締役 田上徳十郎 同支配人 江口東平

監査役 北島佐八 監査役 森猪作

但し、佐賀振業社は可能性大でありもう一社、有限責任 日本土木会社が可能性としてある。日本土木会社は明治 20 年 3 月大倉喜八郎、渋沢栄一、藤田伝三郎と相はかり、資本金 200 万円をもって創立された。明治 25 年 11 月この日本土木会社は解散し、その事業を大倉喜八郎単独経営の大倉土木組に継承した。その後現在の大成建設株式会社となる。【参考資料：大倉建設株式会社 H. P. より】残念なことに工事関係資料が殆どないが、唯一地元大川に残る資料がある、米多比豊治の聴聞資料である。彼は柳川藩立花氏の親戚、立花家米多比一族の二男であった、明治 4 年柳川に生を受けるが、「大川市、民俗聞き取り調査記載」で現場監督とある、16 歳で現場監督は少々無理があり筆者は「監督見習」もしくは「土木技師見習い」ではなかったかと推察する。

彼はその後、満州鉄道に入り鉄道用架橋工事に携わったと娘ノブ子 (92 歳 平成 25 年 2 月聴取) は語る。満州鉄道退職後は導流堤の間近で大川市大野島大角に居を構え村会議員となった。米多比豊治のことを 96 歳超えた娘ノブ子から聴取する際、興味ある話があった。

「父、豊治は満鉄から帰郷し、ここ大川大野島で佐賀中央銀行の諸富支店大野島代理店を経営していた。佐賀の伊丹さんや大島小太郎さんと面識があった。」

大変重要な事実がでてきたのである、特に佐賀中央銀行諸富支店が非常に興味深く思い、筆者はその点に関して調査を開始したのである。佐賀中央銀行に関しては大正 14 年、栄銀行を吸収合併した唐津銀行が改称したのである。帰郷後の豊治は満州に渡る前、栄銀行の関連会社である佐賀振業社に在籍していたから伊丹、大島との接点があり佐賀中央銀行の大野島代理店を開業できたのである。現場監督は栄銀行関連会社、佐賀振業社の従業員であることが考察でき、第三の謎が特定されたのである。

このように、筑後川導流堤は若津港の港湾機能の充実のために築堤され、最も多くの利益を得たのは後に「佐賀財閥」と呼ばれた佐賀の実業家とその事業である。また、これらの謎の裏には大隈重信の影があることを追記して、本小論の最後とする。